

9月にレバノンから、歯科医師のムラド・アジャウィさんとイマド・アジャウィさんが研修のために来日しました。多くの方々のご協力と短期間とはいえいろいろな経験を、知見を得ることができました。

9月15日には歯科事業の報告会「パレスチナ難民を忘れないー難民キャンプでの歯科支援」で二人は活動の報告をしました。そのなかでムラドさんは自らの生い立ちについても話し、参加者は大変に感銘を受けました。忘れられがちなパレスチナ難民の問題を皆さまにもいま一度振り返っていただければと思います。



兄姉と母。中央の母親が抱いているのがムラドさん(1979年)

難民キャンプ

私は1977年にレバノンで生まれました。しかし私の物語は、それより前1948年にパレスチナ人が故郷を追われたときに始まるのです。この年、祖父はレバノンに逃れラシャディエ難民キャンプのテントでの生活が始まりました。

24歳の父と17歳の母が結婚したのは1960年。息子が7人と娘が4人生まれ、9番目が私です。家族は2部屋の家に暮らしていました。当時、難民がキャンプから外に出るためにはレバノン政府の許可が必要でした。両親は、近くのレバノン人の農場で、1日に12時間以上働いたそうです。

1969年にPLO(パレスチナ解放機構)がラシャディエにやってきました。キャンプを防衛し、労働者保護の規則を作り、出入りの許可制を撤廃させたので、難民の多くがPLOに参加しました。私の父もその一人で

私の物語

レバノンのパレスチナ人



ムラド・アジャウィ
歯科医師。レバノンのラシャディエ・キャンプ

した。

1975年4月、レバノン内戦が勃発。1979年、イスラエル軍の空爆で家族はキャンプから避難し、北部の国連の学校で生活をしました。赤ん坊だった私はおなかをすかせてよく泣いていたと母は言います。その後ラシャディエに戻りましたが、キャンプも家も破壊され、翌年国連が家を再建するまで私たちはテントで生活しました。

レバノン戦争

私の記憶は1982年6月のイスラエル軍侵攻から始まります。イスラエル軍は7日間の空爆ののち、ラシャディエや他のキャンプを破壊。キャンプから避難している途中で、2人

の兄と1人の姉が家族とはぐれてしまいました。幸いなことに、数日後に怪我をしていた兄弟とは再会することができました。しかしその時以来、父を見ることはありませんでした。父は抵抗運動に加わり、イスラエル軍に逮捕されて獄中で死亡しました。この時、長兄が16歳、私は5歳、双子の弟たちは1歳半でした。

ちょうど30年前の今日、ベイルートのサブラとシャティーラのパレスチナ・キャンプで虐殺事件が起きます。48時間で3500人といわれる人たちが殺されました。「次は私たちの番かもしれない」。母が子どもたちを集めて涙を流しながら話したことを覚えています。戦争が終わって私たちはラシャディエに戻りましたが、家は破壊されていました。母は一人で11人の子育てをしなければなりません。兄や姉は学校をやめて働きだしました。私や弟も、放課後や休日には農場で働き、家計を支えました。

キャンプ戦争と包囲

1986年ラシャディエは包囲されました。キャンプの包囲は6カ月続き、住民はだれも外に出ることを許されませんでした。キャンプの中には、食料も薬品もなく、そのために多くの人が命を失いました。連日、砲撃が繰り返され、何百人もが犠牲となりました。私たちは民兵が支配しているキャンプの外の農場に食料を探しに行くしかありません。たくさんの人が狙撃されて亡くなりました。私たちは近所の人たちとシェルターで暮らしました。12人用に30人が暮らしました。

包囲の終わったのは1987年の2月。私たちは再び家を壊されましたが、国連はもはや家の再建をしてくれず、私たちは3年間待ち続け、PLOからの資金で家を建てました。兄や姉は必死に働いて再建資金を稼いでくれました。包囲戦の後、「子どもの家」

がラシャディエにセンターを開き、私たち兄弟を含む数百人の子どもたちの支援を始めました。ここで初めて私も弟も子どもらしく遊ぶことを知りました。

歯科医師になる

悲惨な状況から脱出するために、母は子どもたちが学習を続けるべきだと考えていました。母自身は文字の読み書きができなかったのですが、子どもたちを励ますため自分も識字学級に通ったのです。私は中学4年生まで国連の学校に通い、その後、ラシャディエにPLOが作った高校に通い、1996年に卒業しました。そして同じ年の12月ロシアのサラトフ医科大学への入学を許され、そこで6年間勉強しました。兄や姉が私の学費を出してくれました。

2002年夏に医科大学を卒業し、ラシャディエに戻って、パレスチナ赤新月社のクリニックで1年働き、2003年から、「子どもの家」の歯科

診療所で働いています。子ども歯科は現在、レバノンの5か所の難民キャンプで活動をしていて、毎年1万人以上が受診をしています。私はまた2007年には幼馴染のリナと結婚し、娘のラガドと息子のモハンマドがいます。

夢を捨てない

私の夢は、家族が平和に暮らせること、子どもたちが恐怖におびえないこと、子どもにちゃんとした教育を受けさせることです。また、同胞のパレスチナ人たちが惨めな暮らしから抜け出せるよう、できる限りの手助けをすることです。そして最大の夢は、パレスチナに戻ることにあります。私の故郷のアルマ村へ。一度も行ったことのない故郷は、レバノンの国境から数キロしか離れていないのです。

戦争の中では夢も希望も持てないと言われることがあります。しかし、自分が15歳の高校生だった時のことを私はよく覚えています。たとえ

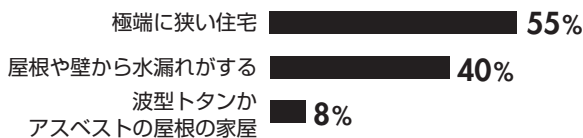
明日死ぬとしても、自分の夢を叶えるという強い決意を持っていました。キャンプの中には保健センターが一つしかないために、一日中待たされるのに薬もないという状態を見てきました。その中で私は医者になることを志し、歯科医師になって人々の生活を助けたいと思うようになりました。

一方で夢を叶えられなかった人、夢そのものを持っていない人も実際にいます。学校へ行かない若者が多く、高校を卒業した人が12%しかいない。というのも大学に行ったとしても、その後仕事がないという現実があるからです。パレスチナ難民は70以上の職に就くことを禁じられ、また不動産を所有できません。レバノンを離れることを勧めるわけではないけれど、若い人が海外で仕事することによって、レバノンに残っている家族の生活を支える、そういうことが必要になっているかもしれないと最近では考えています。

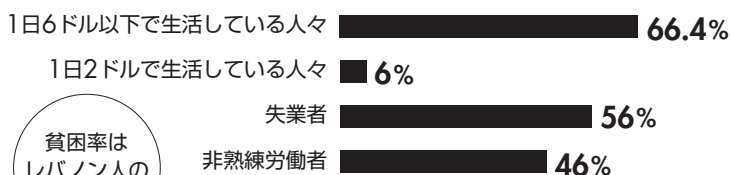
データでみる レバノンのパレスチナ難民 [ムラド医師の報告より]

- 国連登録難民数 約40万人 (実数: 28万人ほど)
- 難民キャンプ 12か所
- 非公式な居住地 42か所
- 難民キャンプに住む割合 62%

- パレスチナ難民は市民権がなく、健康保険や公立学校制度から除外されているうえに、不動産を所有することができない

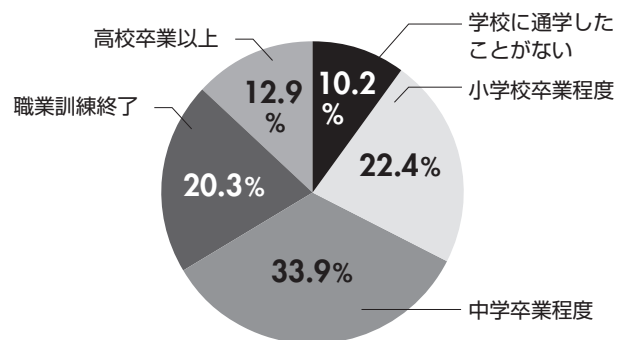


- パレスチナ人は70種類以上の職に就くことを禁じられている



貧困率は
レバノンの
4倍

- 多くの人が学校から落ちこぼれている



- 医療サービスは限定的にしか受けられない

